

「カタカナ英語」とは何か
— 概念整理と効果的な指導のための論点整理 —

大山 慎一

東北公益文科大学総合研究論集第46号 抜刷

2024年2月15日発行

研究論文

「カタカナ英語」とは何か

－ 概念整理と効果的な指導のための論点整理 －

大山 慎一

1. はじめに

(1) 本研究の出発点

筆者が本研究のテーマに「カタカナ英語」を選んだのは、2023（令和5）年7月に授業研究会の助言者として参観したA中学校の英語の授業において、非常に興味深い事象に出会ったことがきっかけである。A中学校は本学が所在する酒田市の中心部にある学校の一つで、学業も部活動も盛んな、地域を代表する中学校である。校長によれば保護者の教育に対する興味関心の度合いが総じて高い地域であり、生徒の授業に向かう姿勢や意欲にもそうした地域性が現れているように感じられた。

その日筆者が参観したのは、ベテランのK教諭が指導する2年生の英語で、人工知能AIの出現に伴い「翻訳家」は消える職業か否かを考えることをメインテーマとする興味深い授業であった。K教諭の流暢な英語で先導されてテンポ良く進んだ。発音練習中はもとより、言語活動中の英語使用場面においても、生徒達はクセのないきれいな発音で活発に英語を話していた。生徒達がK教諭の英語をモデルとして発音の基本を習得したであろうことは容易に想像できた。

この授業の最終盤、非常に興味深い事象が観察された。本時のまとめとして、“I think (that) translators will remain/disappear because(S)+(V).”の構文を用いて各生徒が自分自身の考えについて即興的に英語で作文し、口頭発表する場面で、指名された女子生徒の発表が突然カタカナで書いた英語を読んでいるような口調に変わったのである。その後に指名された男子生徒の発表にも同じ特徴が見られた。校長の許可を得て録音した音声を聴き直してみてもさらに驚いたのは、二人の生徒から即興の英文を引き出そうと働きかけているK教諭の英語も、それ以前の場面とは異なり、その時だけカタカナ文を読んでいるような、日本語訛りの英語に変わっていたのである。

後日、筆者がK教諭にこの事実を伝え、この時意識的に英語の発音を変え

ていたのか尋ねたところ、答えは「否」であった。しかし、筆者には一つの興味深い問いが残った。英語の授業において生徒が難しい質問に答えあぐねていたり、何らかの外的な要素に影響されて答えにくさを感じたりしているような時に、日本語訛りの「カタカナ英語」（本稿の4（3）で定義するまでは仮称。以下同じ）を用いることが、教師が生徒から答えを引き出そうとする際に「呼び水」のような機能を果たしているのではないか、という問いである。少なくともこの日のK教諭の授業では、教師の英語の変化に呼応するように生徒の英語が変化し、答えにくそうにしていた生徒が「カタカナ英語」を使いながら何とか発表し、難しい課題を乗り越えた事実が見て取れたのである。

本来、ネイティブ発音とは異なる特徴を持つ「カタカナ英語」は、学習のターゲットとなるものではない。しかし、日本人の多くにとり、程度の差はあれ英語学習の障害となり得る「カタカナ英語」が、扱い方次第では、学習を促進する効果を生む可能性があるのではないか、というのがK教諭の授業の参観を通して生まれた問いである。

（2）本研究及び本稿の目的

本研究は、大学の教職課程において英語科教育法を履修する学生の学習に資することを目指し、「カタカナ英語」について、日本における英語教育分野での利便を意図し、概念を整理するとともに、学習指導・評価上の留意点を明らかにすることを目的とする。本研究の問題関心は次の二つである。

①「カタカナ英語」とは何か

② 授業で「カタカナ英語」を扱う際はいかなることに留意すべきか

このうち、本稿では①を中心に検討する。さらに、②の検討に向けた重要な教育的視点や論点を整理するところまでを目途とする。

2. 「カタカナ英語」は悪者なのか？

（1）「カタカナ英語」の曖昧さ

「カタカナ英語」は、本稿執筆時点において、日本社会で市民権を得た言葉であるとは言い難い¹。これはこの語が、いわゆる和製英語を指す場合、英語から日本語への借用語を指す場合、日本語訛りの英語を指す場合など、文脈に

応じて多義的に用いられてきたからであると考えられる。学術的にも、使用者によって都度定義され、一定の曖昧さを残しつつ便宜的に用いられてきた概念語であることを、まず押さえておかなければならない。

(2) 「カタカナ英語」と「日本人の英語下手」言説

この言葉と切っても切れない関係にあるのが、日本人は学校で長年勉強しているにも関わらず英語が下手であるという、いわゆる「日本人の英語下手」言説である。これは、その真偽の検討²をよそに、日本人社会において一種の定説のように扱われてきた。第二次世界大戦直後の昭和 22 年に制定された「学校教育法」により現行の 6・3・3・4 制の学校教育制度が発足してから、小学校 5、6 年次に外国語活動が導入された平成の中盤までの長きに渡り、「中学校、高等学校の 6 年間に大学の 4 年間、合わせて 10 年間の英語教育を受けてもろくに英語が話せない」という言説が、一種の決まり文句のように用いられてきた。2020（令和 2）年度には、小学校 3 年次からの英語教育の制度化が完了した³が、公教育における英語教育の前倒しが進められた背景には、経済的要請を「日本人の英語下手」言説が後押しする構図が見え隠れする。

この間、日本語訛りを多く含む「カタカナ英語」は、「日本人の英語下手」を象徴するものとしてしばしば槍玉に挙げられてきた。その代表的な例を、1974（昭和 49）年に出版された『なんで英語やるの?』の冒頭に見ることができる。著者の中津燎子は、1965（昭和 40）年春にそれまで住んでいたアメリカから帰国し「カタカナ英語」と出会った時の衝撃から語り始める。中津は、当時住んでいた岩手県某市の「一流高校の優等生」である女子生徒に英語のレッスンをつけることになるのだが、レッスン初日にその生徒が“there are”を「ゼアラア」、「it is」を「イリズ」、「here is」を「ヒヤリズ」と発音するのに接して驚愕する。さらに、難関の試験を突破して手にしたアメリカ留学をわずか一ヶ月後に控えたその生徒が、アメリカで発表するために準備してきたスピーチ原稿を音読すると、中津にはそれが「見事に一語も」、「全く、最初の第一音から」わからなかったと言う（p.14）。中津は、この出来事をきっかけに、英語の発音に悩む英語教師や一般市民を対象に「異文化対応のための発音訓練」の提供を生業とするようになったと振り返る。

中津の『なんで英語やるの?』は、1974(昭和49)年の大宅壮一ノンフィクション大賞を受賞してベストセラーとなり、さらに10年後には文庫化され、長く読み継がれた。寺沢(2014)は、『なんで英語やるの?』出版の社会的インパクトを評して、「タイトルが象徴するように、日本の英語教育・英語学習に根本的な疑問を投げかけた著作として、英語教育関係者に限らず、語学に興味のある幅広い層の注目を集めた」(p.84)と述べている。「ゼアラア」、「イリズ」、「ヒヤリズ」のエピソードから日本人の英語の問題点を指摘し、それと格闘する日々を綴ったエッセイであるこの本が、多くの日本人に、「学校でどれだけ英語を勉強し成績優秀であっても発音はせいぜい『カタカナ英語』」という観念を広げたとしても不思議ではない。注目すべきは、この文脈において「カタカナ英語」が「日本人の英語下手」を象徴する対象であり、コミュニケーションを妨げる否定すべき対象として意図されていることである。

3. 「カタカナ英語」に関する先行研究

(1) 「カタカナ英語」の2類型

先行研究を概観すると、「カタカナ英語」という言葉の捉え方は、概ね二つの類型に大別できる。第1グループは、英語由来の外来語彙の集合で、借用語や外来語と呼ばれるものがその中心を成す。日本語として定着しているものが多く、通常日本語的に発音される(「アメリカ」、「コンピューター」、「バックアップ」など)。

これを、英語としては意味を成さない、いわゆる和製英語(「バックミラー」、「アイスコーヒー」、「ベースアップ」など)と区別する考え方(柴崎他, 2007, 渋谷, 2012, 須部, 2013 など)と区別しない考え方(加島他, 1987 など)があるが、その境界線は必ずしも明確ではない。

第2グループは、日本語訛りで発せられた英語の語彙(外来語として定着していないもの。例えば、“extradite”(〈国外逃亡犯人を管轄国等に〉引き渡す)を「エクストラダイト」としたものなど)や、日本語訛りで発せられた英語の文や談話(「グッドモーニング、ミスタープレジデント。ハウアーユー?」など)の集合⁴である。

(2) 先行研究における「カタカナ英語」の捉え

インターネット上の検索エンジン Google Scholar で「カタカナ英語」を検索すると、約 13,900 件の論文が抽出される⁵が、そのうちの上位 50 件を精査すると、第 1 グループが 32 件、第 2 グループが 10 件、いずれにも該当しないものが 8 件であった⁶。第 1 グループの範疇で「カタカナ英語」を論じている文献が第 2 グループを数の上で大きく上回っている。これは第 1 グループが、主に和製英語や借用語から構成されており、日常生活に身近であることに加え、当該語彙が基本的に単語であり、文字言語として定着していて論じやすいからであると推察される。「カタカナ英語」を冠した辞書（加島他, 1987）をはじめとして関連書籍が数多く出版されている事実がそれを裏付けている。

一方、第 2 グループには、日本語訛りを伴って発せられた英語の語彙・文・談話が含まれるが、これが第一義的には音声言語であるため、文字言語として扱うことが容易な第 1 グループに比べて扱いにくく、論じにくいという特徴がある。呼称の仕方も難しく、例えば「アイ アム ベリー ハングリー。」といった強い日本語訛りを伴う英語の発話は、Japanese accented English や English with Japanese accent などと称されることがあるが、対象の範囲が文や談話の単位に限られるのか、語彙の単位をも含むのかは不明確であり、これらの表現によって概念規定することは難しいと言わざるを得ない。

4. 本稿における「カタカナ英語 (KE)」の定義

(1) 近似概念: Japlish の検討

「カタカナ英語」を定義するに当たり、近似概念を表す英語である Japlish (Japanese と English からなる合成語で Janglish や Japanglish などとも呼ばれる) の語義を手がかりとしてみたい。Japlish を主要な英和辞典で調べると、下の表 1 のように、語義は「日本語風 (日本式) 英語、和製英語」、品詞は「名詞 (不可算)」と規定している例が多い。

【表1】

書名等	語義	備考
小学館ランダムハウス 英和大辞典 第2版	1 英語混じりの日本語 2 英語訛りの日本語 3 日本語風英語、和製英語	形容詞的にも用いる。 1960. JAP(ANESE)+(ENG)LISH
ジーニアス英和大辞典	=Japanglish 日本(式)英語、 ジャバングリッシュ	Japlish、Janglish ともいう。 時にけなして
研究社新英和大辞典 第6版	ジャップリッシュ、日本語的 [和製] 英語 《old maid を old miss という類》	《(1960)》《混成》 ← JAP(ANESE) + (ENG)LISH
小学館プログレッシブ 英和中辞典 第4版	日本風英語 (の)、和製英語 (の)	Japanese and English (語源)
コンバスローズ英和辞典	日本式英語、和製英語	
リーダーズ英和辞典 第3版	日本英語；英語の多く混じる 日本語	Japanese + English
ジーニアス英和辞典 第4版	ジャブリッシュ、日本(式)英 語、和製英語	Japalish、Japanglish などと もいう。いずれも「耳ざわりな」 という響きがある。Japanese English が中立的な言い方。
ジーニアス英和辞典 第6版	=Janglish (以下 Janglish の記述) ジャングリッシュ、日本(式) 英語、和製英語 (Japlish)	【Japanese + English】 「耳ざわりな」という響きがあ る。Japanese English が中立 的な言い方。

一方、主要な英英辞典は Japlish を表2のように定義している。

【表 2】

書名等	語義	備考
The Random House Dictionary of the English Language 2 nd Edition	1. Japanese spoken or written with a large admixture of English words and expressions. 2. English spoken or written with features characteristic of Japanese.	1955 - 1960 ; JAP(ANESE)+ (ENG)LISH
The New Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles	A blend of Japanese and English spoken by Japanese, either the Japanese language freely interlarded with English expressions or English used unidiomatically by a Japanese.	M20 (筆者注 : 20 世紀中葉) Blend of JAPANESE and ENGLISH n. Cf. JANGLISH
The American Heritage Dictionary of the English Language 4 th Edition	1. Japanese characterized by numerous borrowings from English . 2. English affected by Japanese pronunciation, vocabulary, or syntax.	JAP(ANESE)+ (ENG)LISH
Macmillan English Dictionary for Advanced Learners	a mixture of the English and Japanese languages that is neither correct English nor correct Japanese.	(informal) This word is considered offensive by some people.
The Concise Oxford Dictionary 12 th Edition	a blend of Japanese and English spoken in Japan.	

以上の英和辞典と英英辞典の記述を比較・総合すると、Japlish の語義を構成する要素は、次の四つに大別できる。

- ①英語混じりの日本語
- ②日本語混じりの英語
- ③日本語の影響を受けた英語
- ④和製英語

このうち①の要素は、日本語の変種と考えられ、英語の変種である「カタカナ英語」からは除外すべきであろう。また、②の要素も、「カタカナ」と「英語」の関連において概念規定する上で、英語に日本語が混ざっているか否かは直接的関係がないので除外する。③については、発音面での日本語からの影響が「カタカナ英語」構成上の主要な部分であることから、「カタカナ英語」の定義の核となると考えられる。表2の *Macmillan Dictionary for Advanced Learners* の記述には、“English affected by Japanese pronunciation, vocabulary, or syntax” とあり、影響のうちでも発音を筆頭に挙げている。④については、表1の『ジーニアス英和大辞典』と『リーダーズ英和辞典 第3版』を除く英和辞典が Japlish に和製英語を含めており、「カタカナ英語」を規定する要素として不可欠であろう。その点について英英辞典は英和辞典ほど明示的ではないが、表2の *Macmillan Dictionary for Advanced Learners* の記述では、“a mixture of the English and Japanese languages that is neither correct English nor correct Japanese” として和製英語の存在に間接的に言及しているし、「正しくないこと」を特徴として挙げていることは注目に値する。こうしたことを踏まえると、「カタカナ英語」の概念規定に当たっては、Japlish の語義要素の四つのうち、③日本語の影響を受けた英語、及び④和製英語の二つを土台とすることが適当であると考えられる。

(2) Japlish と「カタカナ英語」

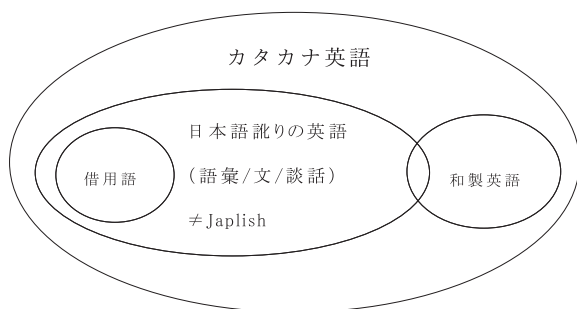
Japlish は、日本人の英語学習者の間あるいは英語教育界において、ある程度認知されているものの、頻繁に用いられている語彙であるとは言い難い。日本人一般においてはなおさらである。これは、そもそもこの語彙自体が、あくまで英語母語話者から見た英語の一変種を総称するに過ぎず⁷、日本

人の日常生活においてさほど必要度が高くないからであると推測される。また、Japlish の“Jap”の語感が、日本人の蔑称として使用されてきた Jap を想起させ得ることも、この語彙の使用をためらう心理につながると考えることも可能である。これは検討を要する問題であるが、本稿の扱う範囲を越えるためこれ以上の言及は行わない。いずれにせよ、本稿が検討する「カタカナ英語」を Japlish で単純に代替するには無理があると思われる。

さらに、いま仮に（１）の③と④を合わせた概念や事象を既存の日本語の表現で総称しようとする、「日本語訛りの英語」や「ジャパニーズ・イングリッシュ」などが選択肢として考えられるが、いずれも和製英語を含むかどうかは不明確であるためこれらの表現で総称するのも適切とはいえない。そうなるとこの概念を呼称するに相応しい日本語の用語が見当たらないのである。これでは、この概念や事象について客観的に言及したり議論したり分析したりする際に、何を主語とするのかについてのコンセンサスを形成しにくく、言及・議論・分析等に支障を来す可能性がある。

こうした事情を勘案すると、日本語訛りを伴って発音される英語及びそれらをカタカナで表記したもの（これには借用語・外来語も含まれる）、それに和製英語を加えたものを「カタカナ英語」と総称することには、この不都合を回避することができるという点で、一定の意義があると考えられる。ここまでの議論は下図のように整理することができる。

【図】



（３）「カタカナ英語（KE）」の定義

既存の近似概念語は、日本語の「日本語訛りの英語」や「ジャパニーズ・イングリッシュ」にせよ、英語の Japlish、Janglish、Japanglish、Japalish にせよ、

いずれも表す意味内容の範囲が不明確であり、授業その他の教育的指導場面で用いるには、いささか使い勝手が悪い。したがって、これらを包括的に呼称する用語として「カタカナ英語」を使用する可能性を検討してみたい。

本稿では、「カタカナ英語」(Katakana English: 以下「KE」と略記)を、次のように定義し、以後この定義に依拠して論じることとする。

日本語を母語とする話者が外国語として英語を学ぶ、教える、あるいはコミュニケーションを目的として使用する場面において発する英語のうち、以下の①～③及びその総体を「カタカナ英語 (KE)」と呼称する。

- ① 意識的であるか無意識的であるかを問わず、母語である日本語の著しい干渉を受けて発せられる音声言語。
- ② ①をカタカナで記述した文字言語。
- ③ 和製英語

(4) KE の特徴

KE は、主に日本語の音韻要素の干渉を受けることで生じるものであり、英語としての誤りや不正確さが避けられない。このためコミュニケーションに支障を来すことがある。こうした KE の音韻的特徴については、次の4点に整理することができる。

- ① 子音の直後に英語の当該語彙には存在しない余分な母音が付加される。
- ② 英語には存在するが日本語には存在しない母音あるいは子音は、それに比較的近い音韻素性を持つ日本語の母音あるいは子音で代替される。
- ③ 英語における強勢 (stress) や抑揚 (intonation) はしばしば無視されるほか、借用語の音韻要素で代替されることがある。
- ④ 英語におけるリエゾン (liaison) や同化 (assimilation) は無視されることがある。

以下これらの特徴を、例文を用いて検討してみる。

【例文】

英語: I am so glad that you made a success.

KE: アイ アム *1 ソー *2 グラッド *3 ザット *4 ユー メイド *5 ア サクセス *6。

KE の発話では、特徴①の例として、*1 に不要な母音の[ウ]、*3、*4、*5 には同様に[オ]の付加が、②の例として、*2 の so[sou] の二重母音に含まれる[u]が欠落し、長母音[o:]での代替が認められる。また③の例として、英語の success が 2 番目の母音 [e] に強勢が置かれるのに対し、KE では *6 「サ」に強勢が置かれることが多いと考えられる。これは英語から日本語への借用語である「サクセス」の強勢が通常「サ」に置かれるからである。さらに、④については、英語の that you における同化、made a におけるリエゾンは無視されている。

こうした特徴を持つ KE と英語との間にはかなり大きな音韻的差異が認められる。したがって、KE の使用によってコミュニケーションに支障を来す可能性があることは、前述の中津（1978）のエピソードが示す通りである。また、KE の持つこうした特性を、日本人の英語の「慢性的な症状」と見なし「処方箋」を提供することを目的とした出版物も存在する（野中，2013）。しかし、KE が常にコミュニケーションの障壁となるわけではない。KE の特徴のうち「処方箋」の必要な「症状」の度合いは話者ごとに異なり、意味内容の伝達可能性の度合いも異なるのであるから、教師が指導する際は、学習者それぞれの個性や学びの実態に応じた対応が求められることになる。

5. 授業で「カタカナ英語（KE）」を扱う際に踏まえるべき教育的視点・論点

（1）学習指導要領における音声の扱いと KE との関連

学習指導要領は、全国どここの学校でも一定の水準が保てるよう、文部科学省が定めている教育課程（カリキュラム）の基準である。児童生徒が変化し続ける社会で生きていくために必要な資質・能力を身に付けられるよう、およそ 10 年ごとに改訂されている。一定の法的拘束力を持ち、全国の学校の教育課程は学習指導要領に基づいて編成される。

小学校 5、6 年次の外国語、中学校の外国語、高等学校の外国語のそれぞれについて、学習指導要領には指導対象となる言語材料が示されている。項目としては、音声、文字及び符号、語、連語及び慣用表現、文及び文構造に区分されている。そのうち小・中学校の音声については、次に示す事項を取り扱うこととされている。高等学校も基本的に小・中学校の取り扱いに準じている。

- (ア) 現代の標準的な発音
- (イ) 語と語の連結による音の変化
- (ウ) 語や句、文における基本的な強勢
- (エ) 文における基本的なイントネーション
- (オ) 文における基本的な区切り

小学校・外国語（文部科学省, 2018a, p.158）

中学校・外国語（文部科学省, 2018b, p.146）

KE は日本語の音韻要素の干渉を受けているため、いずれの事項においても指導上の困難を伴うことが予想される。音声の指導に際し、教師は「現代の標準的な発音」がどのような特徴を持つのかを理解しておかなければならないのであるが、同時に現代においては、様々な訛りを含む多様な英語を World Englishes と称して尊重する潮流があることも押さえておく必要がある。日本語訛りの英語としての KE も World Englishes に含まれるわけであるから、日本語訛りそのものが一概に否定されるべきでないことは、もはや現代英語教育の常識と言ってよいであろう。

ここで教育的に重要な問題は、英語教育の現場（主に授業）において、KE の何がどこまで許容範囲内であるかということである。この問題の検討に際しては lingua franca（母語が異なる集団において共通語として使われる言語）の考え方がヒントを与えてくれるかもしれない。分けても Jenkins（2009）が論じる Lingua Franca Core は、コミュニケーションを成立させる上で最低限必要な発音の要素をリスト化したものとして検討の参考になると思われる。

（２）授業設計や学習指導案作成と KE との関連

授業設計は、教科・科目の目標を、単元の目標へさらに各教時の目標へとブレイクダウンし、目標達成に向けて教育内容及び教育方法を時系列で整理して指導上の指針とするものである。これを一定の約束に従って可視化したのが学習指導案である。学習指導案は言わば授業の設計図であるから、そこで扱われる教育内容は、児童生徒の学習対象として誤りが無く、規範性の高いものであることが前提となる。

その点 KE は、音声面をはじめとする様々な面で不正確さや誤りを含んでいることが多いため、児童生徒がこれを安易に用いることがないように留意する必要がある。しかし、その一方で KE は、母語としての日本語の干渉の結果として生じるものであるから、児童生徒の英語使用において結果的にある程度の KE が認められるのは自然な現象であることを、教師は踏まえておくべきであろう。学習の主体である児童生徒が自ら学ぶ意欲を維持するためには、自己肯定感の安定が不可欠であり、KE の矯正に向けた指導に際しては、こうした心理面への配慮が求められる。

(3) 4 技能・5 領域の言語活動及び技能統合型言語活動と KE との関連

英語の 4 技能とは「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」を指す。このうち「話すこと」を、「やり取り」と「発表」の二つの領域に分け、英語学習・指導の 5 領域と呼ぶこともある。ここで注意したいのは、同じ「聞くこと」でも文脈によって言語使用上の「技能」を指す場合と、学習や指導の範囲としての「領域」を指す場合があることである。

小学校 3、4 年生の外国語活動は、4 技能のうち「聞くこと」と「話すこと」に特化しているが、5、6 年生の外国語から高等学校の外国語までは、4 技能・5 領域のすべてを扱うこととなっている。

また、小学校 3 年生から高等学校卒業まで続く 10 年間の外国語（活動）の目標においては、言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指すこととされている⁸。言語活動とは、一定の目的のもとに言語を用いて思いや考えを伝え合う活動であり、単なる練習とは区別される。

4 技能・5 領域のうち、「話すこと [やり取り]・[発表]」と「書くこと」の言語活動において育成が目指される資質・能力の要素に、accuracy（正確さ）と fluency（流暢さ）がある。日本語の影響を大きく受けている KE は、accuracy の面では負の効果を生む可能性が高い。しかし、もう一方の fluency の面では、教師が児童生徒の英語使用における KE 的特徴を否定しないことで、児童生徒の error（誤り）に対するプレッシャーやストレスを軽減することにつながり、結果的に学習が促進され、fluency が向上することは十分にあり得る。

KE を一概に否定せず、コミュニケーションに大きな支障を生じない範囲に

において容認することは、特に「話すこと」の〔やり取り〕と〔発表〕の二つの領域の指導において効果を発揮する可能性が高いと考えられる（参照：本稿1で言及したA中学校K教諭の授業のエピソード）。さらに、「話すこと」を軸にした技能統合型の言語活動は、難度が高く学習者にかかる心理的負担も重いだけに、児童生徒が自身のKEが否定されないと知れば、安心感が生まれ、より大きな学習効果を生むことも期待できる。

（4）学習評価とKEとの関連

学習指導要領の平成29年度改訂で、各教科の観点別学習状況の評価の観点が、改訂前の4観点から、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理された。

KEはこれら3観点のすべてと密接に関連する。指導と評価は一体のものであるから、指導においてKEを意識的・戦略的に用いるならば、評価においても、その効果の有無や程度が積極的に検討されることになる。

例えば、英語の語彙学習でKEの和製英語を素材として用いたとする。この場合、正しい語彙と和製英語とを語義と発音の両面から比較対照することができるため、学びの深まりが期待できる。この時の指導が、覚えた語彙を言語活動において使えるようにすることを目標としていたのであれば、「知識・技能」の観点で、その語彙を、どの程度発音に注意しながら、使えるようになったのかを評価することになるであろう。また、正しい語彙と和製英語の語彙との差異に着目させ、そのような差異が生まれた原因を深く考えさせて、各自が考えたことを発表できるようになることを目標としていたのであれば、「思考・判断・表現」の観点で、どのような原因を考えることができたのかを評価することになるであろう。あるいは、KEを戦略的に容認して指導したとするならば、それがどの程度児童生徒の英語使用の積極性に繋がったのかを、「主体的に学習に取り組む態度」の観点で評価してもよいかもしれない。

このように、「指導と評価の一体化」の考え方の下、KEは教育内容と教育方法の両面において、学習指導に様々なバリエーションを加え得ることから、学習評価においても、これと有機的に関連した評価基準を設定することで、多様な学びの事実を適切に見取ることが可能になると期待できる。

6. おわりに

本稿は、「カタカナ英語（KE）」を、日本語訛りを伴って発せられる音声言語としての英語と、それをカタカナで表記した文字言語としての英語、それに和製英語を加えた集合として規定した。さらに、それらが英語の授業において必ずしも否定されたり忌避されたりすべきものではなく、一定の配慮を持って扱われることにより、児童生徒の学習を促進する可能性を持ち得ると考え、授業等で KE を扱う上で踏まえるべき教育的視点や論点を整理した。

今後の研究課題としては、第一に、「カタカナ英語（KE）」の有用性について実証的に明らかにすることが挙げられる。これは KE の許容範囲の検討と一体的に進める必要があるだろう。第二に、児童生徒と英語教師がそれぞれ「カタカナ英語（KE）」に対していかなる意識やペリーフを持っているのか、また児童生徒の意識やペリーフと教師のそれらとの間に相関等何らかの関係が存在するのか否かという問題も、検討の価値があると思われる。なお、その調査に当たっては、質問紙法やインタビュー法などによる質的データを用いるのが有効と考えられる。第三に、「カタカナ英語（KE）」を World Englishes の一つと位置付け、異文化コミュニケーション論や社会言語学などの見地から、その機能や役割等を分析することも意義深いと考えられ、今後さらなる研究の広がりが期待できる。

注

¹ 『広辞苑 第7版』（2018, 岩波書店）にも「カタカナ英語」の登載はないが、【片仮名語】として「ふつう片仮名で表記する、主に欧米から入ってきた外来語。日本で外来語を模してつくられた語にもいう」（p.563）との記載がある。

² 「日本人の英語下手」の根拠として TOFEL スコアの国際ランキングの低さが用いられることがあるが、寺沢（2015）はデータサイエンスの知見を基にその根拠としての正当性に反駁を加えている。

³ 2020（令和2）年度より、小学校3、4年次に主に英語の音声に慣れ親しむことを目標とする「外国語活動」が導入され、小学校5、6年次に「読むこと」・「書くこと」を含めた英語の初歩的な運用能力の育成を目標とする「外国語」が正式科目として導入された。

⁴ 細田 (2008) は、「本論では、このような外来語と日本語的に発音された英語の両方を含めてカタカナ英語と呼ぶ」(p.148) としており、本稿の定義と類似しているが、分析対象はあくまで日本語会話における語単位の「カタカナ英語」であり、文や談話は対象外である。

⁵ https://scholar.google.co.jp/scholar?hl=ja&as_sdt=0%2C5&q=カタカナ英語&oq=、2023 年 8 月 28 日検索。

⁶ 第 1 グループには「カタカナ語」で検索されたものが 19 件、第 2 グループには「カタカナ式発音」、「カタカナ発音」で検索されたものが 4 件含まれている。

⁷ 外国語としての英語 (EFL) の学習者を使用者と想定した英英辞典の多くは、Japlish を登載していない。筆者が調査した下の 5 点のうち登載していたのは Macmillan の 1 点のみである。これは Japlish という語彙をグローバルな視点で見た時に、学習対象としては重要度が高くないことを示唆しているものと思われる。

Cambridge International Dictionary of English (1995). Cambridge University Press.

Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary (9th ed.) (2018). HarperCollins Publishers.

Longman Dictionary of Contemporary English (6th ed.) (2019). Pearson Education Limited.

Macmillan English Dictionary for Advanced Learners (2002). Macmillan Education.

Oxford Advanced Learner's Dictionary (10th ed.) (2020). Oxford University Press.

⁸ 学習指導要領が定める小学校・外国語活動の目標は次の通り：「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」。以降、高等学校の外国語まで児童生徒の発達段階等に応じて文言は若干異なるが、いずれも「言語活動を通して」コミュニケーションに必要な資質・能力を育成することを目指すとしている。

参考文献

- 加島祥造・山本千之・坂田俊策編著(1987).『カタカナ英語辞典』.研究社出版.
- 柴崎秀子・玉岡賀津雄・高取由紀(2007).「アメリカ人は和製英語をどのくらい理解できるか－英語母語話者の和製英語の知識と意味推測に関する調査－」.『日本語科学』.第21, 89-110 頁.
- 渋谷玉輝(2012).「小学校4年生のカタカナ英語の意味の理解－英語母語話者の発音する英単語の理解－」.『小学校英語教育学会誌』.12 巻, 44-56 頁.
- 須部宗生(2013).「カタカナ英語と和製英語－最近の傾向を中心として－」.『静岡産業大学論集:環境と経営』.第19 巻第2 号, 127-137 頁.
- 寺沢拓敬(2014).『「なんで英語やるの?」の戦後史－〈国民教育〉としての英語、その伝統の成立過程－』.研究社.
- 寺沢拓敬(2015).『「日本人と英語」の社会学－なぜ英語教育論は誤解だらけなのか－』.研究社.
- 中津療子(1978).『なんで英語やるの?』.文藝春秋.
- 野中泉(2013).『脱カタカナ英語の処方箋 通じる英語の発音とリズム』.NHK 出版.
- 細田由利(2008).『「第二言語で話す」ということ－カタカナ英語の使用をめぐって－』.『社会言語科学』.第10 巻第2 号, 146-157 頁.
- 文部科学省(2018a).『小学校学習指導要領(平成29 年告示)』.東洋館出版社.
- 文部科学省(2018b).『中学校学習指導要領(平成29 年告示)』.東山書房.
- 文部科学省(2019).『高等学校学習指導要領(平成30 年告示)』.東山書房.
- Jenkins, J. (2009). *The Phonology of English as an International Language*. Oxford University Press.

《4(1)で参照した英和辞典及び英英辞典》

【表1】

- 『小学館ランダムハウス英和大辞典 第2 版』.(2000).小学館.
- 『ジーニアス英和大辞典』.(2001).大修館書店.
- 『研究社新英和大辞典 第6 版』.(2002).研究社.
- 『小学館プログレッシブ英和中辞典 第4 版』.(2003).小学館.

『コンパスローズ英語辞典』.(2018). 研究社 .
『リーダーズ英和辞典 第3版』.(2020). 研究社 .
『ジーニアス英和辞典 第4版』.(2006). 大修館書店 .
『ジーニアス英和辞典 第6版』.(2023). 大修館書店 .

【表2】

The Random House Dictionary of the English Language (2nd ed.)
(1983). Random House, Inc .
The New Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles
(1993). Oxford University Press.
The American Heritage Dictionary of the English Language (4th ed.)
(2000). Houghton Mifflin Company.
Macmillan English Dictionary for Advanced Learners (2002).
Macmillan Education.
The Concise Oxford Dictionary (12th ed.) (2011). Oxford University Press.